

## 地域内発的に成立した移動図書館の検討 — 埼玉県和光市の事例から —

石川敬史（十文字学園女子大学）

中岡貴裕（和光市教育委員会）

### 1. 研究の視点と目的

本研究では、1970年代に定着した都市部の市立図書館の移動図書館がいかなる目的で巡回を開始し、地域住民がどのように受容したのかを分析することによって、戦後日本の移動図書館の目的や地域活動との結びつきが、戦後初期から現在にかけていかに連続し断絶しているのかを検討することを研究課題としている。このうち本発表では、地域住民の要求や運動によって成立した移動図書館に焦点を当て、地域住民が施設としての図書館ではなく「非」施設としての移動図書館の開設によって図書館の開館を求めた地域を対象に、地域住民が移動図書館に何を求め、何を期待していたのか、そして地域住民の意向が移動図書館にどのように体现されていたのかを検討する。

具体的には、東京都に接する埼玉県南部の和光市において、「和光市に移動図書館をつくる会」の請願（1972年）によって、1973年12月に巡回を開始した移動図書館「やまびこ号」を分析の対象とする。戦後日本の地域社会形成の過程も視野に、大規模団地が急増する戦後の和光市において、施設としての図書館の開館に先立ち、地域住民らが自動車による移動図書館に対して、どのような図書館像を描き、どのような図書館を求めていたのかを考察している。すでにこうした研究視点によって、中岡と石川は和光市役所、和光市教育委員会の協力を得ながら、これまでに以下の調査を重ねてきた。

- (1)「やまびこ号」の巡回開始当時、活動を担った元図書館員へのインタビュー調査<sup>1</sup>
- (2)和光市内の西大和団地と諏訪原団地の団地自治会による地域文庫や読書会活動が果たした役割と移動図書館との関わり（地域住民へのインタビュー調査）<sup>2</sup>
- (3)西大和団地にて開館式を挙行了した埼玉県立浦和図書館による一日図書館「むさしの号」の活動（元埼玉県立図書館員へのインタビュー調査・資料調査）<sup>3</sup>
- (4)1981年と1993年に更新を重ねた「やまびこ号」に対する住民の要望や、移動図書館の目的や役割の変化（図書館員へのインタビュー調査等）<sup>4</sup>

今回の発表では、和光市役所に保存されている行政文書（市議会会議録、文教常任委員会資料、教育委員会会議録、請願関係資料、予算書等）の調査・分析を中心に、これまでの研究調査を踏まえながら和光市における移動図書館の成立過程を検討する。

なお、(先述した拙稿にも記したが)戦後日本の地域史研究においては、吉見俊哉<sup>5</sup>が1970年代前半までを「戦後社会」、1970年代後半以降を「ポスト戦後社会」と論じているほか、埼玉県入間地域における地域社会の形成過程を検討している鬼嶋淳<sup>6</sup>の研究、地域における「生存」に着目した大門正克の調査<sup>7</sup>、さらには森武磨<sup>8</sup>による1950年代における都市と農村との重層的関係性を検討した神奈川県小田原市の研究などがある。1970年代における団地と社会教育の検討については久井英輔<sup>9</sup>のほか、荻野亮吾<sup>10</sup>は地域社会が成り立つ過程とその構成に行政が果たすべき役割を検討している。これらの研究から示唆されることは、本研究における「やまびこ号」の検討を媒介に、1970年代を中心とした地域社会における重層的な相互関係性や共同性の考察にも結びつけることができるのではないかと考える。

## 2. 和光市の概況と図書館の歩み

埼玉県和光市は、東京都練馬区と板橋区に接する県南部に位置し、東京都内への交通アクセスも良い。1970年10月に大和町から和光市へと市制に移行した同市は、1950年代から工場の進出、1965年以降は大規模団地の建設などによる人口増とともに、転入者と転出者の増加という人口流動の激化も顕著になった。市制移行後も人口増が続き、小中学校の増設も進められていく<sup>11</sup>。和光市における図書館史をさかのぼると、その源流は1962年8月23日に開室した大和町中央公民館図書室である<sup>12</sup>。『広報やまと』27号(1962.6.3)には「公民館に図書室できる」と予告され、開室時間は平日10:00-17:00、土曜10:00-13:00まで、貸出期間は1人1冊5日間と示された。その後中央公民館は新たに建設される総合庁舎内に移転し、1971年6月1日から再開した<sup>13</sup>。

本研究が対象とする移動図書館「やまびこ号」については、新しい中央公民館図書室の開室後の1972年11月末に「和光市に移動図書館をつくる会」が発足、同年12月9日に同会による請願が市議会に提出され<sup>14</sup>、1973年12月18日に巡回を開始するという経緯をたどる。この間、埼玉県立図書館による移動図書館「むさしの号」が和光市を巡回していた。「むさしの号」は1962年8月23日から大和町中央公民館へ<sup>15</sup>、1971年5月からは諏訪原団地や西大和団地などへも巡回し<sup>16</sup>、1972年1月からは大型バスを改造した一日図書館による両団地への巡回も始まった。両移動図書館の巡回先の変化もあったが、1973年度に「むさしの号」が、一日図書館は1975年度に巡回が終了した<sup>17</sup>。現在の和光市図書館が開館したのは1983年8月であり、「やまびこ号」は1981年10月と1993年11月に更新され、2003年3月に廃止された。

## 3. 和光市における移動図書館の成立過程

### 3.1 「和光市に移動図書館をつくる会」の発足

児童文学クラブや、地域文庫、親子読書会の活動をつづけるなかで、市民のひとりとして、“和光市に図書館を”という要求をもつようになりました。

かつて諏訪原団地にて「たつの子親子読書会」や諏訪原文庫の活動を導いた川久保武子の回想である<sup>18</sup>。このうち「児童文学クラブ」とは、公民館が主催する児童文学講座の受講生による自主サークルであり、児童文学に限らず地域社会や学校教育、子どもの生活などにも話題が広がることがあったという。また「地域文庫」とは、1960年代後半以降、団地住民によって開設された西大和団地の西大和文庫(1964年?)や諏訪原団地の諏訪原文庫(1968年)など<sup>19</sup>であり、1981年の調査では和光市内に8文庫が存在した。「親子読書会」とは、これら団地住民らが児童文学講座を契機に自主的に組織した「ありんこ親子読書会」(西大和団地;1971年4月)<sup>20</sup>や「たつの子親子読書会」(諏訪原団地;1971年10月)であった。

「和光市に移動図書館をつくる会」の発足については十分な記録が残されておらず、川久保の回想に留まるものの、当時、川久保が熱心に親子読書会をはじめ、学習会などさまざまな活動を推進していたことが関係者からのインタビューによって明らかになっている<sup>21</sup>。同会の発足は、こうした地域文庫や親子読書会の広がりをもとに、和光市における図書館の未整備の状況、そして埼玉県立図書館による移動図書館の巡回を背景に、川久保ら地域住民による問題意識が顕在化した運動であったと推測できる。

### 3.2 請願書の内容

「和光市に移動図書館をつくる会」は1972年11月末に発足し、12月9日に市議会へ請願を提出している。わずか2週間ほどで3,513名の署名を集め提出したことになる。同会は次のような移動図書館を望み、市民への呼びかけを行っていた。

- ・移動図書館：中型バス1台，蔵書：12,000冊，駐車場所：市内15ヶ所，駐車回数：2週間に1回
- ・子どもだけでも貸出ができる

「市内15ヶ所に図書館バスを走らせましょう」という大きな文字が描かれたチラシには、「私たちののぞむもの」として、こうした具体的な移動図書館が描かれていた<sup>22</sup>。川久保らがどのように署名を集めたのかは不明であるが（おそらく地域文庫や親子読書関係者が中心であったと推測できるが），市議会へ提出された請願書には、11名の紹介議員名とともに次のように要旨と理由が記されていた<sup>23</sup>。

件名：市立移動図書館（ブックモービル）創設について

要旨：読書活動を通じて市民がおたがいに教養を高め、それがひいては市の文化的発展に寄与するため、動く図書館として移動図書館（ブックモービル）創設の早期実現を要望します。

理由：当市には、いまだ市立図書館がありません。中央公民館に小さな図書室があるだけです。したがって、本の数・種類や職員も少なく、市民の期待にこたえてはくれません。市内の交通の便を考えると、中央公民館図書室を利用できるのは限られた地域の市民だけです。読書をねがう多くの市民の要求に応えるものとして、昭和45年から埼玉県立移動図書館による市内巡回が行われ、現在も盛んに活用されています。しかし、月1回、わずかにしかない4ヶ所（西大和団地、諏訪原団地、南大和団地、新倉小学校）にしか停車されていないのです。上記地域外の市民の強い要望があるにもかかわらず、これ以上市内に県立図書館の駐車場増設は認められません。

読書は健康で文化的な生活をおくるための心の糧として大切な一つであります。

本来ならば、市立図書館及びその分館が設置されるべきなのですが、とりあえず手近な方法で、市民のすぐそばまでやって来て市民サービスのできる移動図書館の創設と、その円滑な運営のための専門職員の増員を要望いたします。

昭和47年12月9日

和光市議会議員 大野久治殿

請願代表者

住所 (略)

氏名 (略)

他 3512名

この請願書から、①現在の中央公民館図書室の資料数や職員体制が十分ではなく、図書室を利用できるのは近隣の限られた住民であること、②埼玉県立図書館による移動図書館にも限界があること、③移動図書館が「とりあえず手近な方法」であると同時に「市民のすぐそばまで」巡回できること、④移動図書館の要望の限らず、円滑な運営のために「専門職員の増員」も要望していることを読み解くことができる。当時の公民館図書室や埼玉県立図書館による移動図書館では、利用がその近隣住民に限られるため読書（図書館）の環境が十分に整備されていたとはいえず、本来であれば図書館の設置が必要であるものの、まずは移動図書館の創設と専門職員の増員を求めていることがうかがえる。

### 3.3 請願書の審議

この請願書（請願第17号）については、1973年2月26日の和光市議会文教常任委員会

にて審議された。同委員会には議会側からは委員長、副委員長のほか4名の委員（このうち田中、大畑委員が同請願の紹介議員）が、和光市（理事者側）からは市長（柳下潔）、教育長（富岡吾良）、公民館長（永長海晃）が出席していた。9時23分から13時24分まで審議された議事録が残されている<sup>24</sup>。

### （1）公民館の設置と移動図書館

審議冒頭で公民館長による現在の中央公民館図書室の利用状況、埼玉県立図書館による移動図書館の利用状況に関する報告を経て、教育長と市長は次のように発言している。

- ・基本的な考え方とすれば、市立の図書館があって、それを充実して、なお、足りない分が移動図書館ということになると思います。（教育長）
- ・移動図書館、もちろん、いろいろの点で必要だと思うんです。が、いま移動図書館をとという考え方は、私のほうでは持っていない。……（略）……坂下のほうへ公民館活動ができるような公民館をたてるということなんで、その方面に、48年度は一生懸命やっていきたいと考えています。（市長）

この発言は、大畑欣啓委員より、限られた予算の中から図書室を含む中央図書館の活動と移動図書館とどのように比重を置いていくのか、という質問に対する回答である。市長の発言にあるように、当初は中央公民館の分館として1974年度頃に坂下公民館を新設し、その後、移動図書館の創設を検討するという方向性であった。確かに教育委員会による「昭和48年度和光市教育予算の編成に関する資料」には、坂下公民館に図書用書架（30万円）、図書購入費（20万円）が計上され、図書室としての機能を想定していたことがわかる<sup>25</sup>。

### （2）公民館分館と移動図書館

われわれ文教委員会としては、この請願を付託された以上は、真剣に審議しなければならない。かつ、またこの請願者が3,512名もある。こういう膨大な住民の要求、健康で文化的な生活をおくるということは、憲法で定められた権利。それでこの趣旨から基づいて、できるだけ住民の要望にこたえるということが望ましいことでもあります。

市長や教育長の回答に対し加山由太郎委員はこのように発言し、他市の移動図書館の状況を質問している。田中秀之委員も既存の中央公民館やこれから開設される坂下公民館から遠方の地区（白子、諏訪原）にも今後公民館分館を設置する予定があるのかを質問している。教育長は、今後多くの分館設置は難しいとしながらも、人口が増大すれば地区公民館1-2館の設置可能性も示唆したうえで、「ただいき届いたことを考えますと、将来にむかって移動図書館が設置されれば、それはなお地域の人も喜ぶと思います」としている。すなわち、教育長（市長）は、まずは市内における公民館分館等の設置・充実をすすめ、その後に移動図書館を検討するとしていた。続けて富沢実委員からは市内循環バスの運行に触れながら、バスが市内全地区に及んでいないことを指摘したうえで、次のように指摘した。

市長さんの考えでは、図書室をつくり司書をおいてという考えで、すぐにはできないと。移動図書館のような考えを持つならば、週に1回ライトバンにでも本を持って行って、半日、一日職員がついて貸し出ししたらと。……（略）……いわゆる少ない予算の中から最大の効果を上げようとするならば、アイデアよりも頭を使って、みんなが努力をして、有効な金の使い方を考えるべきだ。

これに対し教育長からは図書費や人員の確保も課題であると回答したが、浅野輝蔵委員（副委員長）からは、何名必要であるのか、補正予算で実現できるのか、という質問がなさ

れた。休憩を複数回はさみ、他市の移動図書館の実施状況（経費等）の回答も踏まえ、最終的に田中委員の賛成討論によって全員賛成によって採択された。

現在中央公民館をはじめとして、地区公民館もできたわけですが、まだまだ足りない。現在においては暫定的に、こういう移動図書館という形になってしまうのではないか。ですから、本当に社会教育の一環として、市当局自身も暫定的ではあるが、移動図書館を充実する必要がある。……（略）……この移動図書館が現在においては必要だということが、私の賛成の基本です。

今後も公民館分館や地区公民館も必要であることを前提にしながらも、まだまだ足りず、「暫定的」ではあるが「現在においては」移動図書館を創設する必要があるとした。この委員会の後、1973年3月8日の市議会3月定例会にて平山義明議員（文教常任委員会委員長）より次のような報告があり、市議会にて委員長報告として採択された<sup>26</sup>。

賛成の主な理由は、市の図書を多くの人が読むことは、人間形成上の、人格形成の上でも、また社会教育の上でも特に必要があり、現在当市には中央公民館の図書室だけで十分ではない。他に多くの人が利用できる方法で、当移動図書館を持つべきであるという賛成討論がありました。

### 3.4 移動図書館創設にむけて

#### （1）補正予算と計画案

文教常任委員会と市議会での採択を経て移動図書館創設への準備は進んでいくことになる。採択直後の1973年3月19日の文教常任委員会にて、1973年度一般会計予算・教育費の審議が行われたが、同予算案には、移動図書館の予算が計上されておらず、田中委員からの指摘に対し教育長は以下のように回答している<sup>27</sup>。

坂下の公民館を建てることを考えていますので、そのあとというふうに考えてますので、早急に移動図書館とはいかないと考えております。

移動図書館創設は次年度予算計上には間に合わなかったと推測できるが、他方で坂下公民館新設の後に移動図書館を検討する意向であったことがわかる。田中委員は教育費の重要性を指摘したうえで、暫定的ではあるが移動図書館へ「具体的に何らかの方法」を検討するよう指摘した。その後、教育委員会（1973年5月15日、6月6日）にて移動図書館の補正予算が提出<sup>28</sup>されることになり、教育長は次のように説明している（6月6日）<sup>29</sup>。

3月定例議会で移動図書館の設置の請願が提出され全員一致で採択されたので今回移動図書館実施に伴う予算7,887千円を要求した訳です。職員2名新規採用内1名自動車免許所有者外1名は司書免許所有者。自動車は2,000ccディーゼル車を購入したい。マイクロバス改造。図書2,000～2,500積載する関係で5,300冊4,240千円新規購入する。

ここでの補正予算の明細書を確認すると約788万円の内訳には職員2名の人件費は含まれていないが、「駐車場協力員謝礼」88,200円（300円×3人×14ヶ所×7ヶ月）と明記されている<sup>30</sup>。続く市議会6月定例会（6月14日）において補正予算が提出され、加山議員より「移動図書館の運用及び計画性」についての質問があった。これに対し教育長より、車名等の募集をすること、「市内に一応14カ所程度」を考えていること、1駐車場に2週間（1時間停車）の巡回周期、1週間4回出動し、午前午後各2ヶ所の駐車場を巡回、駐車

場の設定については「公民館の運営審議会等でご検討いただくことも考えられますし、図書室の運営協議会でご検討いただくというふうなことも考えております」と回答<sup>31</sup>している。続く文教常任委員会（6月21日）においても補正予算を教育長が説明し<sup>32</sup>、副委員長の五十嵐義雄が各駐車場の「地元の応援体制」や協力員について質問、これに対し教育長は「その地域で何とかお願いしますということでやっております」と回答している。

5月から6月にかけてのこれらの審議から、およそ2ヶ月の間で図書館車の具体案や移動図書館の体制、駐車場数などを検討していたことがわかる。

## （2）車名とテーマソング、開館

名前（自動車）応募する。放送テーマ選定、図書購入、これら準備するに3ヶ月必要。出来れば読書週間にオープンしたい。10月末～11月頃。

7月17日の教育委員会<sup>33</sup>では、図書館車の「中央公民館備品取得申し出の件」として教育長が説明し、駐車場の位置については「図書室運営審議会に図って決定したい」とした。車名やテーマソングは、8月『広報わこう』にて「秋から始める市立移動図書館」として広報された（9月15日締切）<sup>34</sup>。そして9月28日の教育委員会<sup>35</sup>では、「車名とテーマソングについて応募したので、その選考を図書室運営協議会に於て、下記の通り決定したので御審議願いたい」とし、車名：やまびこ号、テーマソング：手のひらを太陽に、駐車場：14ヶ所が承認され、『広報わこう』にて駐車場一覧・巡回日程が広く周知された<sup>36</sup>。

この「やまびこ」と「手のひらを太陽に」には、この移動図書館の活動が、明るい太陽のもとに、やまびこのように地域のすみずみまでこだましあい、市民のみなさんの読書活動が活発に伸展し、創造的でゆたかな文化都市の建設に寄与することを期待して命名されました。

続く11月8日の教育委員会<sup>37</sup>では、材料不足のため10月末納車が12月20日になったこと、「県の一日図書館でさえ式典を挙行了したので」「やまびこ号」の開館式を開催することなどが検討された。12月3日の教育委員会<sup>38</sup>にて12月10日に納車、12月17日に開館式、その次第や招待者も提案され、「やまびこ号」は翌18日から巡回を開始した。

## 4. 考察

かつて塩見昇<sup>39</sup>は、図書館づくり住民運動について住民による図書館への要求や関心を大別したことがある。それによると、①図書館の設置、②身近に図書館を、③サービス内容について、④図書館員について、⑤図書館計画（政策）の策定、⑥学習活動への助成であり、このうち本研究が対象とする運動は②が中心に④も含まれ、運動の主体は文庫活動や親子読書会を担う女性たちであった。市内における図書館の整備が十分ではなく、文庫活動や親子読書会の活動、そして埼玉県による移動図書館の巡回をも契機に移動図書館の請願が提出された。「とりあえず手近な方法」ではあるが、住民は生活の足元に移動図書館が巡回されることを望んでいた。行政資料をもとに移動図書館の成立過程を検討しても、時間のかかる公民館分館・図書室の整備を待つことなく、市内全域の住民を視野に、「暫定的」ではあるがまずは眼前の住民へ速やかに移動図書館の成立を目指していたことがわかる。

他方でその成立過程では、車名やテーマソングを市民からの公募とし、駐車場所の選定は公民館図書室運営委員会で検討するなど、住民を巻き込んだ手法を用いていた。とりわけ公

民館図書室運営委員会については、教育長より次のような発言があった（1973年度補正予算審議時の教育委員会での発言）<sup>40</sup>。

公民館図書室の運営委員の協議会の費用弁償として、700円を15人分、6回ということです。中央図書館の図書室もだんだん整理されてきましたし、移動図書館をおかげさまで開設の運びになったので、図書室の運営についてお骨折りをいただいているということをお願いしたわけです。

この運営委員会の活動についてはさらなる検討が必要であるが、「将来図書館の出来るまで暫定的にこれに準じた規則を作り図書活動の充実をはかりたい（図書館法第14条、第16条に準じたもの）」<sup>41</sup>として1972年4月に同委員会細則が制定された。公民館長の諮問に応じ意見を述べ、委員の定数は15名以内、地方自治法第203条の位置づけである委員会であった<sup>42</sup>。同委員会で駐車場を検討したということは（6回の開催）、住民の意見を聞きながら移動図書館を開設した過程をみることができる。

かつて1970年代以降、鶴見和子や宮本憲一らにより提唱された「内発的発展」とは、公害や地域の不均衡を背景に外発型開発を乗り越え、自律的な住民主体による地域形成を主張するものであった<sup>43</sup>。和光市近隣の富士見市では移動図書館運営委員会が活動の経験や課題を報告書にまとめ中央館の建設や図書館網の構築を提案しているが<sup>44</sup>、和光市では果たして請願要求から移動図書館への参画へと結びついていたのかという課題も提出できる。このほか残された課題として、移動図書館利用規程（細則）と公民館図書室規則との関係性、さらには請願を承認した議員（紹介議員）、公民館図書室運営委員会における検討な内容などもあるが、今後も「やまびこ号」廃止の2003年3月までの歴史をたどりたい。

## ■謝辞

本研究にあたり「やまびこ号」や地域文庫・読書会活動に関するインタビューに快く応じていただいた和光市の元図書館員の皆様、地域住民の皆様深く御礼申し上げます。資料調査につきましては、和光市図書館、和光市教育委員会、和光市役所情報推進課、和光市議会事務局の皆様、株式会社林田製作所様にご配慮いただきました。なお本研究はJSPS科研費JP20K02523と十文字学園女子大学プロジェクト研究による成果の一部であり、十文字学園女子大学の研究倫理審査による承認（2019-001）を得ています。

1 中岡貴裕、石川敬史「和光市における移動図書館の歩み：インタビュー調査中間報告」『和光市デジタルミュージアム紀要』6, 2020.3, p.1-12.; 和光図書館史研究会編『和光市図書館のあゆみ』1, 2020.3.

2 中岡貴裕、石川敬史「学びを育む地域文庫の歴史：和光市における西大和団地と諏訪原団地を中心に」『和光市デジタルミュージアム紀要』7, 2021.3, p.27-42.; 和光図書館史研究会編『和光市図書館のあゆみ』2, 2021.3.

3 石川敬史、中岡貴裕「1970年代移動図書館史研究序説：埼玉県立浦和図書館における一日図書館を中心に」『十文字学園女子大学紀要』51, 2021.3, p.159-171.

4 研究成果を2021年度末に報告書3号として刊行予定である。

5 吉見俊哉『ポスト戦後社会（シリーズ日本近現代史）』岩波書店、2009（岩波新書、1050）

6 鬼嶋淳『戦後日本の地域形成と社会運動：生活・医療・政治』日本経済評論社、2019,

7 大門正克『戦争と戦後を生きる』小学館、2009。（日本の歴史一九三〇年代から一九五五年、15）

8 森武磨編著『1950年代と地域社会：神奈川県小田原地域を対象にして』現代史出版、2009.

9 久井英輔「団地と社会教育・再考：高度成長期における都市住民の連帯をめぐる議論の一側面」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第3部, 66, 2017, p.21-30.など

10 荻野亮吾『地域社会のつくり方：社会関係資本の醸成に向けた教育学からのアプローチ』勁草書房, 2022.

11 和光市編『和光市史』通史編下巻、和光市、1988, p.762-777.本発表では町制時代も含め和光市とする。

12 「図書の貸出」『広報やまと』28, 1962.8.15.

13 「総合会館が完成」『広報わこう』13, 1971.5.1.

14 川久保武子「親子読書会から移動図書館請願運動へ」『月刊社会教育』185, 1973.3, p.81-86.

15 前掲「図書の貸出」.同記事には、11:30-12:20まで、中央公民館前に駐車と案内している。

- 
- 16 「県立移動図書館が来ます」『広報わこう』13, 1971.5.1. 両団地のほかに、新倉小学校、中央公民館前広場にも巡回していた。
- 17 「むさしの号」、一日図書館、「やまびこ号」の駐車場変遷は、前掲『和光市図書館のあゆみ』参照。
- 18 前掲、「親子読書会から移動図書館請願運動へ」。和光市内地域文庫の調査は前掲「学びを育む地域文庫の歴史」にて、インタビュー調査に基づき詳細をまとめている。
- 19 「地域・家庭文庫調査報告」『埼玉の移動図書館 1981』全国図書館大会埼玉大会実行委員会編, 1981. 「西大和自治会文庫」「諏訪原団地理事会文庫」とあるが、「西大和文庫」「諏訪原文庫」とした。
- 20 西大和ありんこ親子読書会編『10年のあゆみ』1981.4.
- 21 諏訪原文庫世話人の坂井和子へのインタビューより。詳細は前掲「学びを育む地域文庫の歴史」参照。
- 22 「市内15ヶ所に図書館バスを走らせましょう」『くらしのなかに図書館を：埼玉県公立図書館白書 1973』埼玉県図書館協議会, 1974, p.14 に掲載。
- 23 「請願第17号 移動図書館創設に関する請願書」『昭和46-49年度 請願書・陳情書』和光市議会事務局。1972年度に提出された請願書・陳情書は26件であり、保育や学校教育、道路整備、課税などに関するものが多かった。請願者数は300-700名ほどが多い傾向にあった。
- 24 「文教常任委員会 昭和48年2月26日」『昭和47年度 和光市議会民生経済常任委員会 和光市議会文教常任委員会』和光市議会事務局。本節での引用は基本的に同資料に基づく。
- 25 「昭和48年度教育予算の編成に関する資料」『昭和46-47年度 教育委員会会議録』教育委員会総務課, [1972]. なお和光市の公民館は、1953年に大和町公民館、1961年に白子分館、1962年に新倉、吹上の各公民館（地区館）が設置されていた。
- 26 「昭和48年和光市議会3月定例会 第1日」『埼玉県和光市議会会議録 昭和48年月定例会』和光市議会, 1973, p.75-78.
- 27 「文教常任委員会（2日目） 昭和48年3月19日」『昭和47年度 和光市議会民生経済常任委員会 和光市議会文教常任委員会』和光市議会事務局。
- 28 「協議事項 48.5.15」『昭和48-49年度 教育委員会会議録』教育委員会総務課, [1973]. ここには社会教育費の「移動図書館設置事業」とある。
- 29 「昭和48年6月11日 和光市教育委員会会議録」『昭和48-49年度 教育委員会会議録』教育委員会総務課, [1973].
- 30 このほか「移動図書館用車両」300万円、保険料、重量税、燃料費、修繕料などがあつた。
- 31 「昭和48年和光市議会6月定例会 第2日目」『埼玉県和光市議会会議録 昭和48年6月定例会』和光市議会, 1973, p.107-134.
- 32 「文教常任委員会（6月定例会開会中）」『昭和48年度 和光市議会文教経済常任委員会』和光市議会事務局, [1973].
- 33 「昭和48年7月17日 和光市教育委員会会議録」『昭和48-49年度 教育委員会会議録』教育委員会総務課, [1973].
- 34 「秋から始める市立移動図書館」『広報わこう』68, 1973.8.15, p.8. ここには埼玉県内の移動図書館の車名、テーマソング一覧が記載されている。
- 35 「昭和48年9月28日 和光市教育委員会会議録」『昭和48-49年度 教育委員会会議録』教育委員会総務課, [1973]. ここでは「手のひらに太陽」とある。
- 36 「やまびこ号（車名）と手のひらを太陽に（テーマソング）が決定」『広報わこう』74, 1973.11.15, p.12.
- 37 「昭和48年11月8日 和光市教育委員会会議録」『昭和48-49年度 教育委員会会議録』教育委員会総務課, [1973].
- 38 「昭和48年12月3日 和光市教育委員会会議録」『昭和48-49年度 教育委員会会議録』教育委員会総務課, [1973].
- 39 塩見昇「図書館づくり住民運動と地方自治」『図書館づくり運動入門』図書館問題研究会編, 草土文化, 1976, p.199-240.
- 40 「文教常任委員会 昭和48年9月13日」『昭和48年度 和光市議会文教経済常任委員会』和光市議会事務局, [1973].
- 41 「昭和47年3月1日 和光市教育委員会会議録」『昭和46-47年度 教育委員会会議録』教育委員会総務課, [1972]. ここでは「目玉商品として移動図書館を市独自でやってみては」と篠崎道雄委員長代理からの発言もあつた。
- 42 永長海晃「和光市公民館図書室および移動図書館の運営について」『埼玉の移動図書館 25周年記念号』埼玉県移動図書館運営協議会, 1975, p.21-22.
- 43 鶴見和子, 川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会, 1989.; 松宮朝「『内発的発展』概念をめぐる諸問題：内発的発展論の展開に向けての試論」『社会福祉研究』3(1), 2001.7, p.45-54.
- 44 富士見市市立図書館移動図書館運営委員会編『市民の図書館をめざして』1973.